

読者の皆さんは春に咲くシデコブシの花を見たことがあるでしょうか？ソメイヨシノが咲くよりも少し前の時期に開花する、白くて少しウェーブのかかったたくさんの花弁が目立つ花です。シデコブシは岐阜・愛知・三重の3県のみ分布する希少種ですが、多治見市内のあちこちの里山で自生個体を目にする事ができます。そんなとても親しみ深いシデコブシですが、現在、多くの自生地が存続の危機にさらされています。「開発の影響？」と思うかもしれませんが、むしろ保護されている場所で問題が生じています。シデコブシが生育する里山は、1960年代頃までは燃料や肥料採取のために利用されていました。シデコブシも軽くて良く燃えるために焚き付けに利用されていたそうです。しかし、現在、里山の木々は利用されなくなり、うっそうとした森林になっています。シデコブシは明るい環境を好むのですが、もともとそれほど大きくなるポテンシャルを持っていないため、そのような林では周りの他の木々に被圧されて

しまい、弱ってひよろひよろの樹形になり、花も咲かなくなり、次々と枯死していきます。柵を作って保護するだけではだめなのです。また、シデコブシは林内の湿地に生育しているのですが、シデコブシも含む周りの木々が水を吸い上げ、落ち葉を落とすことにより、湿地環境の乾燥化も進んでいます。湿地にはシデコブシの他にも、明るい環境を好む多くの希少な植物が生育しています。シデコブシの生育するこのような環境を保全するためにはどうしたら良いのでしょうか？長くなってきたので、この続きは次回に回します。



▲市内にある自生地のシデコブシの花

(岐阜県立森林文化アカデミー 講師 玉木一郎)

土岐川観察館の自然だより

青と緑の物語

問 土岐川観察館 TEL 21-2151

～夕焼け小焼けの赤トンボ～

童謡の中の赤トンボは、夕焼け空の下で翅を*アカネ色にきらめかせ飛ぶさまは秋の風物詩的存在です。ところが、単にアカトンボという名前のトンボは存在しません、成熟して腹部だけが赤くなる種を総称してアカトンボと呼んでいるのです。

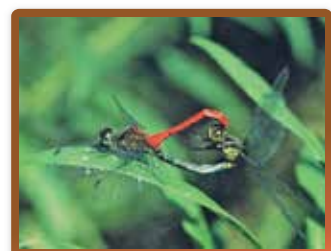


▲ 枯れたアザミの花で翅をやすめるナツアカネのオス (三の倉町)

多治見市内で出える種類を数えてみたら15種類になりました。6月頃に羽化し、最初腹部の色は黄色ですが、秋が深まるころオスは腹部が赤くなり、メスはそれほど赤くなりません。

それではアカトンボはどうして赤くなるの

でしょうか。ある研究によれば、オスは日向で縄張りをつくり強い日差しを浴び続け、紫外線の影響で赤く変色します。赤くなることで紫外線に耐える体になるそうです。



▲マユタテアカネの交尾
上がオス、下がメス(三の倉町)

アカトンボの幼虫は水田やため池(止水性環境)にすんでいます。小川や河川(流水性環境)にはすめません。

皆さんもアカトンボの観察に里山の水田やため池のある場所にでかけてみてはいかがでしょうか。

*染料植物であるアカネの根で染めた沈んだ赤色のこと。夕暮れ時の空の色やアカトンボの名前に使われています

(多治見昆虫会 林 英昭)